

7-4			
主題	ご利用者の自己実現に向けてアプローチしたことによる影響と効果（一事例）		
副題	歩くことは最高の喜び		
キーワード1	自己実現	キーワード2	アプローチ
		研究(実践)期間	12ヶ月

法人名	社会福祉法人 浴風会		
事業所名	第三南陽園		
発表者(職種)	小山晃一(介護職員)		
共同研究(実践)者	三浦慎吾		

電話	03-3334-2193	FAX	03-3334-2198
----	--------------	-----	--------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	社会福祉法人浴風会は、大正14年に関東大震災の被災老人援護を目的として設立された高齢者の為の保健・医療・福祉の総合施設。第三南陽園は、平成14年に開設した3番目の従来型の特別養護老人ホーム。定員207名、短期入所定員15名。		
------------------	--	--	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

K様 91歳 男性 要介護3
 入所前：歩行中の転倒により、左大腿骨頸部骨折され、老健に入所される。
 (平成26年12月に当園に入所される。)
 性格：プライドが高く、なんでも自分でやらないと気が済まない。几帳面。約束事・時間に強いこだわりがある。

K様は生活全般において自立されているが、転倒をきっかけに居室にこもりがちになってしまい、歩行器の使用もためらうようになってしまった。そのため移動手段はほとんど車椅子である。

様々なストレス要因(センサーマット、食事席の不満、フロアの公衆電話の撤去)があり、精神的に不安定である。

以前のように活動範囲を広げ、より意欲的に自分らしく生活できるようになる為に、私たちはどのように関わって行くべきなのか。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

①自己実現(歩行器を使っての廊下の付き添い歩行)や様々なストレス要因(センサーマット、食事席の不満、フロアの公衆電話の撤去)をなくすことを通して、普段の生活に自信と張りを持って頂き、意欲的に生活できるようになって頂きたい。

②職員がご利用者のアセスメントの大切さを改めて認識し、1人ひとりに適切な関わり方をすることで、よりその人らしい生活を過ごせることに気づくこと。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- K様から生活における要望の聞き取りを実施。『歩行器を使って歩きたい』、『自宅に電話をしたい』と話されることがある。
- 職員向けのアンケートを実施し、K様が抱えている問題とその対応策について答えてもらう。
- 24時間生活変化シートを2週間使用し、K様の生活リズムや精神面の変化を把握する。
- 職員が付き添いで歩行器を使用し歩行練習を実施する。また、ストレス要因になっているセンサーマットの撤去、食事席の変更、1階への公衆電話の付き添いを実施する。
- 4ヶ月後に再アセスメントとして職員にアンケートをとる。K様の身体・精神面の変化と今回の研究を通しての職員のアセスメントに対する意識の変化について調査を行った。

《4. 取り組みの結果》

- K様は今回の取り組みで頻繁に関わった職員に対しては自発的に話しかけて下さるようになった。また、歩行練習により適度な疲労感が得られ、夜間は熟睡されることが多くなった。そのせいか日中は以前より精神的に安定され、笑顔も増え、以前より明るくなったように感じられる。
- また、公衆電話や歩行の付き添いの他に新たに1階の売店への付き添いの希望やウクレレをもう一度弾きたいというお話しもご本人の要望として出てきた。部屋にこもりがちであったK様にとっては大きな一歩である。
- 研究実施後に職員アンケートを再度行った結果、K様の変化に関わった多くの職員が実感しており、アセスメントを行う重要性を改めて認識することができた。

《5. 考察、まとめ》

K様は歩くこと（自己実現）とセンサーマット、食事席の不満、フロアの公衆電話の撤去（ストレス要因）をなくすことを通して自信を取り戻し、以前より意欲的に生活できるようになったと思われる。

また、この研究をモデルケースとして各職員がご利用者のアセスメントの大切さを再認識し、1人ひとりに適切な関わり方をする中で、よりその人らしい生活を過ごせることに気づくきっかけにもなった。

今後の課題として、今回のような個別ケアをどのようにして他のご利用者にも展開していくかを考えていかなければならない。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- 秋葉都子（2016）『個別ケア・ユニットケアのための介護サービス向上ハンドブック』（中央法規出版）
- 香川正弘ほか（1999）『いきがいのある長寿社会学びあう生涯学習』（ミネルヴァ書房）

《8. 提案と発信》

丁寧なアセスメントをすることで、ご利用者のQOL向上に繋がった。ご利用者が自分らしく生活できるように介護職としてしっかりと向き合っていかなければならないと考えている。